# ITP-EUROPA 派遣報告書

博士後期課程　横田さやか

派遣期間　　平成 22 年 9 月 1 日〜平成 23 年 7 月 31 日

派遣先　　ボローニャ大学（イタリア）

受入教員　　エレーナ・チェルヴェッラーティ教授

研究テーマ　　イタリア未来派の舞踊

研究内容

1909 年の創立宣言を皮切りに生まれたイタリア未来派が創作した舞踊を研究テーマとしている。とりわけ、「航空ダンス」を踊ったバレリーナ、ジャンニーナ・チェンシ(Giannina Censi 1913-1995)を中心に、そのダンスに表現された未来派の思想を追い、後に隆盛するモダン・ダンスの萌芽の時代にあって未来派のダンスをいかに位置づけることができるのか、またその重要性を考察する。

派遣期間中の研究成果

ボローニャ大学文学部芸術・音楽・演劇映画学科に在籍し、舞踊を専門とされているチェルヴェッラーティ教授に師事した。大学では、シンポジウムや大学院の授業に出席し、演劇専攻の他の博士課程の学生から刺激を受けつつ学んだほか、自身のテーマに関わる美術史や舞踊史の授業も聴講し、知識を深めた。既習の内容であってもそれをイタリア語でさらい直すことは、論文執筆の基盤固めとして大いに役立ったといえる。

研究の成果としては、まず、東京外国語大学とボローニャ大学の共催で行われたシンポジウムにおいて研究発表を行った。博士論文の中心テーマとなるバレリーナ、ジャンニーナ・チェンシの「航空ダンス」を、宣言にも謳われた未

来派の飛行への憧れが「航空絵画」を生みだすまでの試行の過程のうえに重ねるという基本的な視点をもとに、19 世紀のバレリーナ、マリー・タリオーニ(Marie Taglioni 1804-1884)のバレエを気球による飛行技術の発達と重ね考察することで、舞踊の歴史の側からチェンシのダンスに向けられた新たな視点を定めることに成功した。このテーマについては継続して取り組み、舞踊批評家としてのアントン・ジュリオ・ブラガーリア(Anton Giulio Bragaglia 1890-1860)による未来派ダンス批評を引用し論を深めたうえで論文として書き改めた。執筆論文としては、このほか、二本の論文に取り組んだ。いずれも未来派についての論文である。未来派の終焉を何年に設定するかは長年批評家によって意見の分かれるところであったが、報告者は博士論文において未来派を第一次大戦後から創立者マリネッティ(Filippo Tommaso Marinetti 1876-1944)の死までも含む芸術運動として扱うため、あらかじめ未来派の年代定義を明確にする必要がある。この問題については、ボローニャの各図書館の豊富な蔵書に大いに助けられ未来派の年代定義にまつわる文献や先行研究を隈無くあたることができた。そして博士論文の基盤となる未来派定義の論理的根拠とすべく、イタリア国内における批評史を論文にまとめた。もう一本は、日本におけるイタリア未来派批評の変遷をまとめたものである。とりわけはじめの二本はイタリア語での執筆ということもあり、内容においても、執筆の経験においても、博士論文の土台となる非常に有意義な取り組みであった。

歴史ある大学の街ボローニャでは、大学図書館、公立図書館は豊かな蔵書を備えており、環境に恵まれたなかで研究を進めることができた。街にある図書館やアーカイヴを巡れば常に目的の資料を手にできたこと、そして舞踊を研究されている教授のもとで熱心な他の学生たちとときに情報交換などをしながら研究を進められたことは、これ以上ない貴重な環境であり、報告者も大いに刺激を受け、日々の学びのすべてが研究をさらに深めることに貢献したことを実感している。

最後に、ボローニャ大学大学院で充実した研究生活を送ることができるよう支えてくださった東京外国語大学指導教員和田忠彦教授をはじめ、ITP-EUROPA 関係者のみなさまに、この場をお借りして改めて感謝の意を記したい。9 月からの派遣期間中には、今年度の反省点を活かしつつこれまでの研究成果をかたちにできるよう鋭意取り組む所存である。